

文芸・言語学系

教員数	教員等数 (人)	教授 27 (26)	助教授 20 (21)	講師 13 (15)	助手 3 (3)	技官〔準研〕 1 (1)	
	異動状況 (人)	退職・転出 1 (4)	昇任 4 (-)	採用 2 (5)	学内 -		
研究活動	研究発表 (件)	論文・著書発表数		学会発表数			
		国内	国外	国内	国外		
		113 (55)	14 (6)	19 (11)	14 (8)		
	受賞数	1 (2件)					
	研究費等		採択件数	採択率(%)	金額(千円)		
		科学研究費	19 (17)	46 (44.7)	33,900 (26,900)		
		学内プロ	8 (10)	50 (50)	5,100 (6,049.6)		
奨学寄附金件数・金額		4件		1,757千円	(4件)	1,926千円)	
受託研究件数・金額		件		千円	(件)	千円)	
	受託研究員	人 (人)					
施設・設備							

・ () は前年度の数値を示す。

1 文学・言語学系の活動

文学・言語学・言語教育および隣接諸領域を研究分野とする本学系では、それぞれの分野において活発な研究活動が行われた。その成果は、前年度と比べたときの論文・著書および学会発表数に示され、国内外の論文・著作件数は127件、研究発表は33件で、いずれも前年度のほぼ2倍である。学系発行の紀要「文藝言語研究」(文藝篇)(言語篇)も例年通り二回刊行された。

また、COEに向けては、本学系構成員が中心となって「文化価値の生成・移動と日本(Translation and Transcreation of Cultural Values in Japan)」が立案され、提出された。結果は不採用であったが、広範な視点と共同研究態勢への積極的な取り組みは評価してよい。今回の経験を生かし、この申請の準備過程で形成された人的資源や知的資源は、より有意義かつ有効な研究目標にむけて今後活用したい。

2 自己評価と課題

前年度と同様、本学系の活動と運営は概ね円滑に行われたが、研究組織と教育組織の対応が拡散的である現状は大きく変わっていない。学類の再編成、研究科組織のあり方とあわせ、継続して考えるべき課題である。また本学系構成員は前年度より2名減少した。人員削減による教育面への影響が懸念される。

研究費に関しては、科学研究費の採択件数が前年度よりわずかながら上昇し、全体の金額もアップした。しかしまだ十分に満足すべき数値とは言えず、各人の自覚と一段の努力が求められる。

外国人研究者の受け入れは、韓国3、中国2、台湾1、アメリカ1、となっている。前年度まで行われていたような共同研究(「筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト」)は本年度は組まれなかったが、国際的な研究教育の交流とその向上は、本学系に与えられた重要な課題であり、今後に向けていっそう積極的な取り組みが必要である。